

## 映画評論 暗い日曜日(Szomorú vasárnap) (1999年封切り、ドイツ映画)

盛田 常夫

日本でも評判になった作品。一時帰国する度に、友人たちからこの映画の話を聞かされた。ブダペストが舞台になっている物語だが、ハンガリーで上映されたのを覚えていない。どうにかして観たいと思っていたが、最近ブダペストの書店で偶然にこの映画のDVD（ハンガリー語版）を見つけ、すぐに鑑賞した。ハンガリー語版のDVDは2枚組になっていて、付録の2枚目に出演者や主題に関係した人々の各種インタビューが収められている。

日本への一時帰国に合わせて、日本語版もamazonで注文し、早送りで観た。これはドイツ語原版的な日本語字幕版で、1枚のDVDに映画とインタビュー編が収録してあった。インタビュー編はハンガリー語版の簡略版である。

### ストーリー

ハンガリーの後場のピアニストが作曲した Szomorú vasárnap と題する曲をヒントに作られた、1人の女性と3名の男性をめぐる恋物語。字義通りに訳せば、「悲しい日曜日」、「メランコリックな日曜日」、「鬱陶しい日曜日」になる。Szomorú は「暗い」というより、「鬱な」、「寂しい」という意味合いが強い。人妻への失恋歌として作曲されたものだ。

映画舞台は1930年代のブダペスト。ユダヤ人サボー・ラースローが所有する高級レストランで繰り広げられる人間関係をめぐって物語が展開する。

冒頭シーンは1990年代半ばのサボー・レストラン。ドイツの客人が妻を同伴して、50年振りにこのレストランで会食し、80歳の誕生日を祝う。楽団に「暗い日曜日」の演奏を頼むが、その演奏途中に、この客人は心臓発作で死去する。

ここで場面は一転して1930年代。ラースローと恋人のイロナがレストランを切り盛りする。このレストランでピアニストを雇うことになり、アンドラーシュが採用される。飄々とした風情のこのピアニストは、すぐにイロナに恋する。そこから、ラースロー、イロナ、アンドラーシュの奇妙な3名の生活が始まる。イロナは気の向くまま2人の男を行き来する。イロナは2人を自分のものにできるが、2人の男性はイロナを半分ずつしか自分のものにできない。気の良いラースローは嫉妬を感じながらもイロナの自由に任せ、他方でアンドラーシュもイロナを独占しようとはしない。何とも不思議な関係が続く。

そして、この3人の間に、レストランの客である若いドイツ人ビジネスマン、ハンスが加わる。イロナに一目惚れしたハンスはすぐに結婚を申し込み、一緒にドイツに行こうと誘うが断られ、失意のうちにドイツへ戻る。

アンドラーシュがイロナの誕生日に、自らが作曲した作品を贈る。この曲「暗い日曜日」はたちまち欧米でヒットし、この曲を聞いて自殺する者が絶えず、世界的な話題作になる。

それから時間が過ぎ、ハンガリーにもナチスドイツが進駐してくる。彼のドイツ人ビジネスマン、ハンスはナチスの将校としてブダペストに派遣され、ラースローのレストランの常連客となる。ある日、ピアニストのアンドラーシュに「暗い日曜日」を弾けと命令するが、彼を嫌うアンドラーシュは演奏を拒否する。銃で脅すのを見たイロナはアンドラーシュに駆け寄り、アカペラで歌いだす。歌わないと断言したはずのイロナは、歌い終わると足早に調理場に行くが、その瞬間、銃弾の音を聞く。アンドラーシュがハンスの拳銃を手

に取り、自らの命を絶ったのだ。

アンドラーシュが亡くなり、3人の奇妙な生活に終止符が打たれたが、残った2人には深い悲しみと虚しさが残る。

ブダペストではナチスドイツによるユダヤ人排斥が強まり、やがてラーズローも追放対象に上る。逮捕が間近と感じたラーズローは手紙と毒薬を手にするが、その途端にドイツ兵がレストランに入り込み、ラーズローを連行する。イロナはラーズローを助けるべく、ハンスが陣取るナチスドイツ司令部の館へ向かう。ソ連軍の接近で劣勢になった司令部は撤収作業を終え、ハンスが残務処理で1人館に残っている。そこに現れたイロナに、ラーズロー救出の口約束を与え、エリカの体を奪う。

舞台は東駅。収容所送りのユダヤ人たちが貨車に乗り込むところへ、ハンスが免罪の書状を持って現れる。しかし、彼が助けたのはラーズローではなく、ナチの役に立つ学者だった。

それから間もなく終戦となるが、イロナはラーズローの子供を身ごもっていた（この息子の父親はハンスかもしれない）。この息子がサボー・レストランの二代目として、レストランを取り仕切っている。そして、今、50年振りにレストランに現れたのが、母を騙し、父を収容所送りにしたドイツの客人ハンスだった。彼の皿にラーズローが残した毒が盛られ、母と息子は復讐に成功する。

## テーマと脚本

脚本はニック・バルカウによる小説（1988年）にもとづくが、原作はラーズローとハンスの葛藤を描いたもので、イロナの存在はない。ロルフ・シューベル監督による脚本。

ドイツ人ハンスに復讐するという映画の筋書きはいわば落ちのようなもので、冒頭シーンと最後のシーンを繋ぐ役割をもっているが、映画全体の本筋には関係なく、話を締めくくるための道具だ。主要なテーマはイロナとラーズロー、アンドラーシュをめぐる三角関係。この不思議な三角関係に、1930年から1940年代の歴史が重ねられ、ドイツ人ハンスが入り込む。

欲を言えば、この時代の雰囲気をもっと醸し出す構成が欲しかった。メランコリーな雰囲気醸し出す工夫が不足している。主題曲と自殺の流行を媒介する舞台設定がもっと必要だった。そうすれば、創り話的な印象をもっと払拭することができただろう。

## 時代背景

映画全編を通して流れる主題曲「暗い日曜日」は、ハンガリーのピアニスト、シェレシュ・レジュー作曲（1933年）になるもの。これがフランスのシャンソン歌手ダミアによって歌われたことからシャンソンとして世界的に知られることになり、以後、数多くの欧米歌手がさまざまな編曲で歌い、日本では淡谷のり子を初め、シャンソンを専門とする歌手が歌っている。

巻末に掲載した通り、セレスシュの原曲には彼の作詞が付されており、「世界の終わり」と題されている。**Szomorú vasárnap** と題する作詞は、ハンガリーの新聞記者ヤーヴォル・ラーズローが付したもので、テーマは同じ失恋と絶望である。

シェレシュは現在も営業しているブダペストのレストラン、キシュピパ（Kispipa）など

のレストランでこの曲を弾いていた。先行きが不透明な 1930 年代の憂鬱が感じられるメロディは多くの若者の心を捉え、自殺へと導いた。歌詞そのものは失恋の絶望を歌ったものだが、ナチスドイツの支配へ向かうヨーロッパは何とも言いようのない閉塞感で満ちており、展望が開けないもどかしさに、若者たちが絶望し、死を選んだのだろう。

作曲家シェレシュ本人も 1968 年に自殺するが、これは癌を患ったこと。多くの国で演奏禁止の曲に指定された。戦後の社会主義ハンガリーでは西欧かぶれした音楽の演奏が禁じられ、場末のレストランの楽士たちにも演奏禁止曲リスト一覧が配られていたという。その中に、この「暗い日曜日」も含まれて、長い間、ハンガリーでは演奏が禁じられていた。シェレシュは客が帰って静まったレストランで、1 人のこの曲を弾いていたという。

### ドイツと日本の差

悪役ハンスを演じたベン・ベッカーは、脚本を読んでこの役に乗り気がしなかったようだ。過去の事実在即したものとはいえ、自らの民族の醜さを映画にするという発想は、今の日本人にはないだろう。この映画はドイツ人監督によるドイツ映画である。

日本の過去の侵略を描くことが「自虐史観」と批判され、「南京で日本軍が 30 万人を殺したのは嘘」、「慰安婦に軍は関与していない」、「沖縄自決を軍は強制していない」などという政府や与党議員の「言い訳」だけが先行する日本では、民族の愚行を映画文化の中で描く精神的な余裕はない。30 万人は根拠薄弱だとしても、数万人の虐殺なら許されるのだろうか。軍が実質的に関与せずに慰安婦事業が存続するはずがないではないか。形の上で強制がなかったことを主張することにどれほどの意味があろうか。そういう詰まらぬ言い訳が先行する歴史観こそが問題だということが分からないのだ。

ナチスドイツの贖罪を背負って戦後の建国を進めたドイツと、原爆による敗戦で被害者意識だけが残り、侵略と虐殺の歴史を忘れた日本との決定的な違いは、映画文化にも現れている。

### 俳優たち

それにしても映画制作とは奇妙なものだ。主演を演じるマロジャー・エリカはハンガリーの舞台女優、ラースローを演じるヨハイム・クロールとカーンを演じるベッカーはドイツ人俳優で、ピアニストのアンドラーシュを演じるステファノ・ディオジニはイタリア人俳優。原版はドイツ語だが、ロケーションではそれぞれが母語で演じているはずだ。ドイツ語版にしてもハンガリー語版にしても、吹き替えが旨くできていて、どちらも皆同じことばで会話しているように見えるから不思議だ。それぞれの短いカットで、ストーリーを確認しながら演技しているので違和感はないのだろう。オペラでも、ゲスト歌手が原語で、現地の歌手が現地語で歌うこともあるから、それと同じことか。

マロジャー・エリカはこれが最初の映画出演だった。監督の抜擢に応え、この映画でドイツの各種の映画賞を受賞し、一躍国際的に名を知られることになり、以後、サボー・イシュトヴァーンの映画に起用されるなど、映画への出演が多くなった。ハンガリー語版の DVD に収録されているインタビューでは各俳優が皆化粧なしのすっぴんでインタビューに答えている。ここで見るエリカはふつうのハンガリー人女性。街で見かけても、気づかないだろう。俳優とは何とも不思議な商売だ。

同じことはディオジニについても言える。素顔はかなり粗が多いが、銀幕のイロナとアンドラーシュははるかに魅惑的だ。エリカは色気のある魅力的な女性をうまく演じているし、ディオジニは実際にピアノが弾ける。映画でも彼が実際にピアノを弾いている。それを含めて、孤独な芸術家の痩せ男役をうまく演じている。

屋外ロケーションはすべてブダペストだが、レストランはドイツのケルンにあるスタジオ内に作られたもの。一見して、グンデル・レストランを小規模にした印象を与えるが、ハンガリー人建築家が制作したものだ。ブダペストのレストランを借り切ることも考えられたが、制作資金を提供した篤志家の要望に応じて、ケルンに建設されたようだ。

ハンガリー語版（ドイツ語字幕あり）のDVDは4500Ft、日本語版（ドイツ語原版、日本語字幕）のDVDはamazon.co.jpで4935円（中古品が4000円から購入可）である。ドイツ語かハンガリー語を勉強したい人はハンガリー語版を購入されることをお勧めする。

「暗い日曜日」原譜（世界の終わり）

Hindenjog fenn tartva.

VÉGE A VILÁGNAK...

A Szomori Vasárnap új vers változata Szeres REZSŐ verse és zenéje

Adagio

05

és nem de peregnék a sírgútt levelek, meghalt a földön az emberi szeretet.  
Vége a világnak, vége a reménynek, városok pusztulnak, arapótok zombinok.

És a város kapuival zárolg az éjszaki fényes vár új tornacsomom vár és vár... Mibe sír és árba szomszár  
Embernek, véréki piros a farsang rélt. Mafalok fokozódik az új szerzetesek... Míg a város...  
Sziro len, rússok és kasszik az emberek... Meghalt a...  
Uran az emberek gyökök és hibásak... vé-ge, a...  
szere- fel!  
vil- lág- nak!

SZOMORI VASÁRNAP...

Szomori vasárnap sok fehér virággal,  
Várta az kedvesem templomi imádkozni.  
Almákat kergető vasárnap délelőtt  
Én a tóhoz hirtelen néztem vissza  
Azóta szomori mindig a vasárnap  
Kényy csak az ifjúság, kanyarok börtön.  
Szomori vasárnap.

Utolsó vasárnap kedvesem gyere el,  
Pap is tess, kaporsó, ravatal gyászkapal.  
Mikor is virág vár, virág és - kaporsó,  
Virágos fák alatt utam az utolsó  
Míg az utolsó, hogy még a város...  
Az a felj a szomori...  
Szomori vasárnap.

János László verse,  
K. K. Hunya P.

Copyright 1946 by Gárdos Budapest-New York, Co. 2019

「暗い日曜日」歌詞（ヤーヴォル・ラースロー作詞、盛田訳）

<i>Szomorú vasárnap</i>	悲しい日曜日
<i>száz fehér virággal</i>	百の白い花束で
<i>vártalak kedvesem</i>	君を待つ
<i>templomi imával.</i>	神への祈りを込めて
<i>Álmokat kergető</i>	夢を追い続ける
<i>vasárnap délelőtt,</i>	日曜日の昼下がり
<i>bánatom hintaja</i>	悲しきブーメラン
<i>nélküled visszajött.</i>	君なしで戻ってきた
<i>Azóta szomorú</i>	それから続く悲しみ
<i>mindig a vasárnap,</i>	日曜日はいつも
<i>könny csak az italom,</i>	飲むことだけが心を癒し
<i>kenyerem a bánat.</i>	苦しみを糧とする
<i>Szomorú vasárnap.</i>	悲しい日曜日

<i>Utolsó vasárnap</i>	最後の日曜日
<i>kedvesem gyere el,</i>	君よ来たれ
<i>pap is lesz, koporsó,</i>	牧師も、棺も
<i>ravatal, gyászlepel.</i>	霊柩車も、喪章も
<i>Akkor is virág vár,</i>	花も待っている
<i>virág és - koporsó.</i>	花と、そして棺も
<i>Virágos fák alatt</i>	花開く木々の下で
<i>utam az utolsó.</i>	それが私の最後
<i>Nyitva lesz szemem, hogy</i>	眼を見開き
<i>még egyszer lássalak.</i>	もう一度君を見たい
<i>Ne félj a szememtől,</i>	私の眼を恐れるな
<i>holtan is áldalak...</i>	死しても君を愛でるのだ
<i>Utolsó vasárnap.</i>	最後の日曜日